

米 I T 企業的好決算や中国景気拡大期待等から日本株は終始底堅く推移

2010年1月19日(水)

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

好業績期待等を背景に米国株は堅調地合いが続く

欧州株式市場では主要株価指数は軒並み上昇しました。特にスペインの I B E X 指数は銀行株を中心に +3.0% の大幅高となりました。スペインの短期国債入札が好調であったことや、ロシアが政府系ファンドによるスペイン債購入禁止の指示を解除したと報じられたことなどが好材料となりました。欧州全体でも、1月のドイツの ZEW 景況感指数が +15.4 と予想 (+7.0) を大幅に上回り、6ヶ月ぶりの水準まで改善したことも追い風となり、銀行株や自動車株中心に買いが優勢でした。

休み明けの米国株式市場も好業績期待等から景気敏感株を中心に続伸し、NYダウは約2年7ヶ月ぶり、NASDAQは約3年2ヶ月ぶりの水準を回復して引けました。米銀大手の決算が予想を下回ったことなどから金融セクターは反落しましたが、エネルギー、資本財・サービス、ハイテクなどの幅広いセクターが堅調に推移し、相場を支えました。寄り前に発表された米銀の10-12月期決算は、貸倒引当金が大幅に減少したことなどから、純利益は前年同期の▲76億ドルの赤字から+13億ドルの黒字に転換しました。しかし、トレーディング部門が振るわず、純営業収益はアナリスト予想に達しませんでした。これを受けて当銘柄は失望売りが膨らみ、他の金融株にも売りが波及しました。一方、引け後に発表された米ハイテク企業大手2社の四半期決算はいずれも予想を上回りました。情報端末大手の多機能携帯やタブレット型PCの売上が好調で、10-12月期決算は大幅な増収増益となり、売り上げは過去最高を更新しました。また、翌四半期の業績見通しもアナリスト予想を上回り、ポジティブサプライズとなりました。当銘柄は寄り付き後に急落後、好業績期待から下げ幅を縮小して引けましたが、好決算を受けて時間外取引で上昇し、CEO休職発表前の水準近くまで値を戻しました。また、IT大手の四半期決算も増収増益となり、四半期ベースで過去最高を記録しました。企業のIT投資への回復傾向が窺われる結果で、当銘柄も時間外取引で大幅高となりました。

中国のマクロ経済指標の発表を控えて終始小動きも、新興国需要を見込んだ買い等が日本株を支える

欧米株高等を背景に国内株は堅調に寄り付きました。ヘッジファンド等から主力株中心にバスケット買いの観測も出ており、日経平均株価は10,500円台後半での堅調な展開となりました。業種別では鉄鋼株は前日に引き続き弱さが目立ちましたが、電機や自動車等の外需関連株中心に軒並み堅調でした。また、アジアでの工場建設を発表し、アナリストの投資判断引き上げを受けた繊維株大手が大幅高となるなど、好材料の出した個別銘柄を物色する動きもプラスに寄与しました。後場に入ると、明日発表が予定されている中国のマクロ経済指標の数値が香港メディアを通じて伝えられました。数値の真偽については不明ですが、2010年のGDP伸び率は+10.3% (予想+9.4%)、12月のCPIは事前予想とほぼ同じ前年比+4.6%でした。中国株式市場では投機筋中心に上げ幅を急速に広げたものの、日本株市場に与える影響は限定的で日経平均株価の後場の日中値幅も20円程度と動意に欠けました。ただし、その間、プラス寄与トップに機械セクターが躍進するなど物色動向には変化が見られました。明日の中国のマクロ経済指標の発表を前に投資家は依然として様子見姿勢が濃厚で薄商いでしたが、中国の高い経済成長率を見越した資源関連や機械株などの堅調さに加え、米IT企業的好決算を追い風に電機セクターも終日堅調で日本株を支えました。結局、日経平均株価は前日比+38円高の10,557円と小幅ながら3日続伸して引けました。

以上